

---

# 僕って

ぺったん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】  
僕って

【Nコード】  
N3868F

【作者名】  
ぺったん

【あらすじ】  
ありふれた日常に身を置く主人公にいろんな事件が巻き起こる。

## プロローグ

ひささかたろう  
久坂太郎は歩道を歩いていた。  
てくてくてく。

学校の帰り道、沈みかけた太陽は寂しそうに泣いている。

「なんてあるわけがないか…」

意味不明の独り言。

ちなみに一緒に帰っている学友はおらず、太郎一人である。

そして容姿については極平凡で、ありふれた一高校生。

身長も160センチ前後、髪は黒く長髪でもなく短髪でもない。

顔は可もなく不可もなくといった感じだ。

そして異星人でもなければ幽霊でもなく変温動物でもない、ただの一般人だ。

『いやいや、あたり前だろ！』

おっと、それは失敬。

な〜どと、ツッコミを主人公本人から頂戴したところで久坂太郎の物語が始めたいと思います。この物語は作者のその場の思いつきで進行していくのでこれといった深い内容はないのであしからずう。



## 第一話

次の日。

目覚まし時計が鳴り響く…チャンスを許さず久方太郎は時計のスイッチを押していた。時刻は六時半。

太郎の目覚めは早い。とくに早起する理由はないが幼少の頃から習慣でこの時間にはぱっと目が覚めてしまう。土、日もしかり。ベッドの上であくびを一つ。

「うん…なんかいつもより今日はすこぶる体調が良い気がする」  
久坂太郎の体調がどうであれ、一日の始まりである。

まず一階に下りて顔を洗いトイレを済まし、二階に上がって制服に着替えてからまた一階に下りる。せわしいように感じるが動き自体は緩慢で緊張感はない。早起きのおかげで ありう。太郎が向かった先はリビングだった。

「あら、おはよう」

部屋に入るなり久方太郎の母、喜美江きみえが笑顔であいさつしてきた。  
「うん、おはよう母さん」

おっとりした性格の久方喜美江はこの家の大黒柱である。なぜなら父親の哲男は海外へ出張中だ。もう四年も帰っていない。だが毎月哲男から仕送があり、それでなんとか家計を支えているのも事実で、この仕送りが少しでも滞ると速攻離婚しようかと考えているらしい。

「そうだ。お姉ちゃん起こしてきてくれない？」

太郎は後ずさる。

「げっ！ また？」

「今、母さん手が離せないの。お願いね」

「ええ…」

太郎が嫌がるのにも理由がもちろんあり、太郎は口を三角にして

みたび二階に上がった。

コンコンコン。

太郎の部屋の反対側にある扉をノックする。

「姉ちゃん、朝だよ。起きてよ」

返事はない。

「もう、姉ちゃんつてば！」

ここで起きてくれたら困ることはなし、なので起きたこともなし。

太郎は唾を飲む。

「は、入るよ」

おそるおそる扉を開けた。間取りは太郎の部屋と変わらない六畳一間。

ベッドの位置も一緒である。

姉は布団を全身に被っていてさながら繭状態であった。

「姉ちゃん、朝だけど…」

なぜか声は小声である。大きい声が出せない、普通は逆なのだが太郎は小声なのに喉がカラカラで渴いた気分になっていた。

「うーん…」

繭がもぞもぞと動く、そのおかげか姉の顔が出てきた。

太郎は耳元でささやくように言った。

「朝だよ、姉ちゃん起きた方がいいと思うよ」

次の瞬間、ズドム！！

鉄拳が太郎の顔面をとらえた。腰から崩れ落ちる。そして咆哮が轟く。

「おらあ！ 田辺こんなんで終わりかよ！ コラアッ！！」

解説しよう。太郎の姉、久坂蘭らんは太郎と高校は違うがその学校のスケ番なのである。日々、縄張り争いに参加してはタイマンとかなんとか…今時珍しい珍獣であった。

「い、イタイよ。姉ちゃん」

鼻から血を流しながらもなんとか立ち上がった。

「あ。太郎か。なんだもう朝か。ていうかなんで鼻血出してんだ？」

「いや、もういいよ…」

「なんだと、コラ！！ 人がせつかく心配してやってるのに。あつコラ」

太郎は足を漫画のようにピューっと回転させながら部屋から消えていった。

「あゝもう。まだ鼻が痛むよ」

ここは太郎がいつも通っている通学路。太郎は今年高校生になったばかりであった。

「おつす！」

太郎に声をかけてきたのは同じクラスの木村である。

「よう…」

「なんだよ。元気ね〜な〜。うわっ、っーかなんだその鼻は！？」

「…ああ、姉ちゃんにやられた」

木村は後ずさる。

「やつぱ、この町の四天王だけあるな。お前の姉は…」

太郎の鼻は鼻血はすぐに止まったが二倍ぐらいにふくれあがっていた。

「ははは。しかし、よかったぜ。俺んちは凶暴な姉がいなくてよ」

「笑い事じゃねーっつの！」

まあ、そんなこんなで学校に到着。ややってホームルームが始まった。

教壇に上がるは佐々木紀子、<sup>ささきのこ</sup>23歳。整った顔立ちで男子生徒からも人気のある教師である。

「はい。みなさん、いいですか。今日はなんと、この教室に転校

生がきてまーす」

『えーウソ、マジマジ!?』などと声が飛び交い教室が騒がしくなる。

「静かにしてください。では、天馬君入ってー」

ガラツと扉をスライドさせて教室に入ってきた転校生に太郎含めた全員が驚く。端麗な顔立ちで美少年を集める事務所にいてもおかしくはないぐらいの美男子だった。ただ転校生の髪はサラツとしていて実に青かった。誰かが呟く。

『不良だ』

『不良なの?』

今度はボソボソと囁く声が教室に充満する。担任の紀子是不穏な空気を察知してかフォローを入れる。

「天馬君はなぜか突然変異で髪が青いの。決して不良じゃないわよ。ささ、天馬君自己紹介してね」

「天馬俊作てんましゅんさくです。よろしくお願いします」

これが久坂太郎と天馬俊作の出会いであった。



## 第二話

髪が青い転校生、天馬俊作。

一体、彼は何者なのか。

久坂太郎は天馬俊作を視界に入れつつぼんやりと開口していた。佐々木紀子が空いてる席を指す。

「天馬君は、え〜と、あの空いている久坂君の横の席に座ってね」  
「はい」

太郎の席は黒板から見て右から2列目の一番後ろで、左となりの空間は確かに空きスペースであった。朝来てからいつのまにか机があつたのでまさかとは思っていたが、

「やはり、僕の隣だったのか」

天馬俊作は様々な視線を浴びながら近づいてくる。特に女子からは熱い視線が放たれていた。天馬俊作は自分の席までくると太郎に白い歯見せながら、

「よろしく」

「えっ、よ、よろしく」

握手こそしなかったものの爽やかな笑顔を見せてから天馬は席についた。

「え〜では、ホームルームは終わりまーす。一時限目は数学なのでみんな頑張ってね〜」

『はい』と生徒全員が異口同音に答える。

太郎は思う。ここは幼稚園かと…。高校生活一ヶ月とちよい、薄々と感じていたがこのクラスの生徒（担任も含め）のほとんどが陽気であっけらかんとしていて幼稚である。ま、どうでもいいけど…と、太郎はため息ついた。

「ちっ…どもめ…」

「っ!？」

太郎は振り向いた。誰に…？ 今日転校してきた天馬にである。  
「ん？ なんだい？」

天馬俊作は何事なかったようなに微笑んでいた。

さっきの声は彼の声に思えた、というか完全にそうだったが…。

「えっいや、なんでもないよ」

「そうか。僕は今日来たばかりだから分からないことがたくさんあると思うんだ。いろいろと教えてくれるかい？」

「僕が？」

「うん。僕の隣は君しかいないからね」

「いいよ。僕の名前は久坂太郎だ」

「久坂太郎君か、良い名前だね…」

鮮やかでさらさらとした青い前髪の間から黒い瞳が太郎を見ていた。

物語は一気に放課後へと進む。

「みんなー、帰り道は気をつけるんですよ。部活のある人はいいい汗流してね。では」

『起立、礼、さようなら』

喧噪を残しつつみなみな思い思いに散っていく。

「さて、僕も帰るかな」

太郎は部活に入っていない。特に深い意味はない。興味がある部活がないのだ。

ちなみに前回登場した木村はバスケット部に入っている。その木村も体育館に直行したようだ。ノートやら教科書を入れた鞆を持ち席を立つ。

その時背後から声が聞こえた。

「久坂君。ちょっといいかい」

太郎は振り返る。

「えっ、天馬君どうしたの？」

天馬は五、六人ぐらいしか残っていない教室を見渡してから、  
「君に用事があるんだけど時間は大丈夫かな？」

太郎は少し逡巡してから答えた。

「いいけど…用って？」

「これから僕と一緒に来て欲しいところがあるんだ」

太郎が何か言おうとするのを天馬は右手で遮って。

「場所は歩きながらね。大丈夫、手間は取らせないから頼むよ」  
しぶしぶ承諾すると天馬を先頭に教室を出た。

夕日に染まった廊下を歩く。

「で、どこに行くんだ？」と太郎が尋ねる。

「校舎の裏さ」

「校舎の裏？」

「ふふ、来てもらえばわかるよ」

階段を下り、また廊下を少し歩いて玄関で靴に履き替えて外に出ると学校をぐるっと回って校舎裏に来た。

いろいろ不思議に思う。まるで自分の学校のように迷わず天馬は校舎の裏まで来た。それに何故ここに来たのかもわからない。辺りは校舎の影になっていて薄暗く人っ子一人いない。

「ここまで来たらもういいかな」

「一体なんなんだよ？」

「こういうことだよ」

天馬俊作がパチンと指を鳴らす。

『ゴゴゴゴゴ』と地鳴りが響き草むらから何か物体が出てきた。

精密な機械音を発しながらその物体の全体が見えてくる。大きさは2メートルぐらいだろうか厚い装甲のような物に覆われたまさしく人型ロボット。頭と銅は円柱のように繋がっている。いつのまにかもうもつと煙が立ち込めていて、ロボットの頭と思われる部分が開く。

「はいいつ？」

ガパンと大きな口を開けたロボットに天馬は颯爽と乗り込んだ。  
ぷしゅぷしゅロボットは音を立てながら太郎を指さす。

「アハハハ！ 久坂太郎。今日、貴様は死ぬ運命にあるのだ」

### 第三話

ガボンと開いていたロボットの蓋が閉じる。

「意味がわからん!?」

太郎は驚愕していた。

「お前が理由を知る必要はない!!」

天馬の声はロボットの胴体にあるぶつぶつとした黒い点々から声は発せられているようだった。掃除機のホースのような細く長い腕の先についている三本の指が動いた。その指が立体の三角形ように重なり高速で回転する。まるでドリルがまわっているようにも見える。

「わわっ」

何が大変かわからず、困惑する太郎。

「ふふ、終わりだ久坂太郎」

「天馬君、冗談だろ。や、やめてくれよ!」

「うるさい。死ね!」

ポコンポコンと妙な音が聞こえ、ロボットはこれまた細い足を器用に動かして太郎に迫って来た。ガチコンガチコンと不気味に走るロボットに対して太郎は身動きすらできずにその場にぺたんと座り込んでしまった。

「観念したか。ふはっはっは!」

無情にもロボットの鋭い一撃が太郎を襲う。これでこの物語も終演かと思われたが太郎の前で激しい金属音がした。次に天馬の声が聞こえてきた。

「貴様はっ!?!」

太郎が恐る恐る目を開けると、太郎の目の前に人が立っていた。

「えっ!? 女の子:??」

そう、太郎と同じ学校の制服を着ている女子生徒が刀でロボットの攻撃を防いでいた。それは見事なまでに。そして太郎に一瞥する。

「何してんの! 早く逃げなさい。このアホンダラ!!」

「はいっ！？」

横顔しか見えないが限りなく整った顔立ちでロングヘアの女の子。身長は太郎と同じぐらいだろうか。

「聞こえないの！ 逃げろってんでしょ！ 耳付いてないわけ！？」  
ゆらりと鬼の形相でギリリと睨まれた太郎は恐怖で震えてしまったがとりあえずこの場から脱兎の如く逃げ出した。

天馬俊作はロボットの中で舌打ちする。

『くそ、なんて展開だ。これは予想外だ。許さん』

ロボットがもう片方の腕を振り上げる。またもや三本の指を回転させながら女を攻撃するが女もすぐに反応した。

つばぜり合いを演じていた腕を弾くと、攻撃してきた腕もひらつと避けてロボットの胴体を刀で斬りつけた。音的にちゅぎゃいんって感じで。女は斬りつけてからくるくる前転してロボットから離れる。

次の瞬間、バチバチと火花を散らしてからロボットは爆発した。凄まじい轟音が校舎の裏で反響する。辺り一面に煙がもうもうと立ち込め、からんからんとロボットの金属片が舞い落ちる。

「終わったわ」

そう言つと、刀を鞘に収め、一躍して姿を消した。なんという身体能力だろうか。これが女サムライこと佐藤雪菜と最初の出会いであつた。

一方、太郎は逃げると言われたものの、何処に逃げて良いかわからず物陰からこっそり一部始終見ていたのであつた。

「そうだ、天馬君は…」

太郎は視界がよくなってきたので近づいてみることにした。ついさっきまで命を狙ってきた相手とはいえ天馬の安否が気になっていた。



## 第四話

「うっ…ここは」

天馬のすぐそばから声がした。

「気がついたみたいだね。天馬君」

「おまえっ！」

「ここは保健室だ。全然ケガもないって先生が言ってた」

天馬は自分を覆っている薄い上掛け布団に目をやり、再び横に立っている太郎に視線を戻す。

「天馬君はさっきの爆発で気絶していたんだ。それで僕が君をここまで運んだんだ」

「っ！」

さっきの爆発と聞いて天馬は困惑した顔している。だがそれは太郎も同じだ。この一件の事は意味不明のまま進行している。ただ、太郎はロボットが爆発したの後、現場に戻ると盛大にはじけ飛んだ割に胴体の上の部分がほとんど無傷で残っていて、ぐったり気を失っていた天馬を発見したのだ。そして人道的に天馬を背負い保健室まで来た。

このことを天馬に説明すると、

「バツカヤロー。俺はお前の命を狙ってるんだぞ！」

「けど、あのままほっとくのも」

ふん、と鼻を鳴らして天馬は中空を見る。

「まったく考えられん。俺なら速攻で相手を殺しているだろうな」

今日一日見ていた天馬とはかけ離れる言動にたじろぎつつも太郎は今もつとも疑問にしていることを聞いてみた。

「なんで、僕を殺そうとしているんだ？」

動揺したのか天馬の眉がピクリと動いた。

「……………」

ちなみに保険の先生は今はいない、いたら絶対にしない質問だ。



太郎は続けた。

「君と会ったのは今日が初めてだ。恨みを売ったり買ったりなんて行為はしていないし、それとも遠い知り合いとかで僕に関係する何かがあつたのかい？」

「……………」

天馬は喋らない。視線は天井を見上げたままで、その目は冷淡そのものだった。

ふう、と太郎はため息をつき俯いた。

沈黙した時間が流れる。静かすぎてキーンと耳鳴りしてる気さえた。横目で夕暮れのオレンジ色に染まった保健室を眺めた。野球部の練習のかけ声や音、吹奏楽部の演奏も聞こえない。もろもろが部活動している場所とここは距離がかけ離れているのだ。

俯きながら太郎はふと気になった。

そっぴや、あの校舎の裏の爆発音は誰にも聞かれなかったのだから、もしかするとさっき保険の先生が慌てて部屋を出たのはそれが原因だったのでは？　と思考していたが、いやいやと首を振り腕時計を見た。二人が黙って約十分ぐらい経っただろう。太郎は一向に口を開かない天馬を一瞥して帰る決心をした。天馬は無事だったし、何よりこの時間が無駄に思えてきたからだ。

「じゃあ、僕は帰るよ。明日は、」と言いかけると天馬が太郎の声を遮るようにして口を開いた。

「久坂太郎。俺はお前の子供なんだよ」

いきなりの爆弾発言。太郎は一瞬耳を疑った。そして大気が凍り付いたようにも感じた。

「えっ？」

「だから俺はお前の子供なんだって、正確にはずっとずっと先の子孫だけだな」

二回言葉を聞いても口から出て来るのは同じセリフだった。

「えっ？」

## 第五話

次の日、天馬俊作は学校へ来なかった。

朝のホームルームで担任の佐々木先生が風邪で今日は欠席だと話していた。転校してきて二日目休みということで僕を除いた他の生徒は若干困惑した様子であった。特に女子からは落胆した声が聞こえた。

今はこの昼休みで太郎は弁当の箸も進まず、ぼんやりと黒板を眺めながら昨日の天馬との会話を思い出していた。

『俺はお前の子供なんだよ』

『えっ…それってどういう事？』

『詳しく説明していたら話が長くなるから簡単に説明しよう』

『うん』

『久坂太郎、お前は記録上84歳で死ぬ』

『えっ！！　ちよっ…』

『まあ、待て。これは驚く事じゃない。単なる寿命だよ』

『…あ、うん』

『話はこれからだ。お前は84歳で死ぬ前に後の世界戦争に発展するきっかけを作るらしいんだ』

『せ、世界戦争？』

『ああ、俺のはそのきっかけを止めに未来から来たんだ。あの口ボツトに乗ってな』

『未来から…』

『そして、それが起こったのはお前が40代後半だと俺は聞いている』

『あの、その、きっかけって？』

『…わからん、俺も詳しくは聞かされていない。それが起こる前に久坂太郎を抹殺するという任務を受けた。わざわざ軍にいた子孫で

ある俺を指名してな。子孫であるお前も同罪だの久坂太郎を殺せば  
両親の安全を約束してやるとか言われてこの時代にやってきたが…  
この様だ」

「……」

「まさか、この学校にあんな強い生徒がいたとは思ひもしなかった  
ぜ」

「じゃ、未来の世界はどうなってるんだ？」

「どの国も戦争の真つ最中だ。この国とこの国の仲が悪いとかじゃない。  
どの国も占領できる国があれば我先にと潰していつてるのさ」

「そんな…日本は？」

「未来ではこの国は違う国に植民地とされている」

「ウソだろ！」

「本当だ。それにほとんど確かな国境なんてなくなっている。国の  
軍の武力が行き届いている範囲が国境とも言えるがな」

「…未来…戦争…きつかけが僕…」

「まあ、信じるか信じないかはお前次第だ」

「……」

「おつす！」

「うわっ」

太郎は突然の声に我に戻った。

「なんだ、木村か」

「何ぼーっとしてるんだよ」

「いや、別に…」

しかし天馬の話を何度思いだしてもにわかに信じがたい。あれから  
保健の先生が帰って来たのそれ以上話ではできなかったが、確かな  
ことは天馬俊作に襲われたという事実だ。もしかしたら女の子が助  
けてくれなかったら本当に殺されていたのかもしれない。そういえ  
ばあの女子生徒も気になる。

「まーた、ぼけっとしてるよこのバカは」

「何だよ。俺の勝手だろ」

木村はニヤツと笑うと、

「女の悩みかね？」

「ばっ違うつて、」

木村は腰を引きながら、

「まさか…お、男の悩みか。そっちの気があつたのか太郎!？」

「アホか!！」

木村の話は突飛過ぎて困ると思い、まだ八割ほどあつた弁当を急いで口に運ぶと胃に流し込んだ。

「やけ食いとは末期だな、こりゃ」

咀嚼しながら太郎は天馬俊作にもう一度会って話をしようと決意した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3868f/>

---

僕って

2011年1月19日02時51分発行